

# 世界恐慌期、中国における信用構造の再編

―長江上・中流域の桐油流通と金融を中心に―

岡崎 清 宜

はじめに

南京国民政府期（以下、国民政府期）の金融像は、近年、変貌をとげている。世界恐慌の本格的な到来は深刻な経済危機を国民政府にもたらした。旧来、近現代史研究では、商業金融における錢莊（両替商）の残存と、銀行の莫大な公債保有に着目し、産業に基盤をもたない銀行、というイメージがあった。そのため、国民政府期の錢莊の衰退と銀行の台頭、すなわち農工業投資や貸出の拡大は、「畸形的発展」<sup>①</sup>とされ、国民政府への評価と同様、否定的にとらえられてきたのである。近年、国民政府の金融政策や銀行の農工業投資は、国民政府再評価にともない、肯定的な評価がほぼ定着した。とこ

ろが、銀行や錢莊の商業金融を対象とする研究は、おどろくほど行われていない<sup>②</sup>。

このような研究上の欠落が生じたのは、研究史に起因する所が大きい。中国近現代史研究は、近年、国民政府の再評価に力を注いだ。商業自体、「発展」の検出には適さないため、商業金融の分析は行われてこなかったのである。むしろ商業金融は、預金過剰に苦しむ銀行と錢莊典当の破産に悩む政府によって、農村復興策の一環として進められた、農業投資の枠組で研究されてきた。ただし、銀行貸付における商業金融のシェアは、農業投資や工業金融に比べ圧倒的に高い。また農業投資の大部分を占める農業倉庫貸付は、商業金融とほぼかわらない。世界恐慌期の中国の信用構造の変容を考える上で、農業投資の枠組から分析する手法は、やはり大きな問題

がある、といわざるをえまい。<sup>③</sup>

本稿の目的は、以上の問題関心のもと、一九三〇年代、長江上・中流域における桐油流通と金融を分析することを通して、従来の枠組では十分に把握できなかった、南京国民政府期の信用構造の変容を明らかにすることにある。先行研究では華北については若干の研究があるものの、他はほとんど解明されていない。<sup>④</sup> 桐油を採りあげるのは、輸入代替政策の下、政府がさかんに栽培奨励した棉花とは対極にある、重要な輸出商品であったためである。長江の上・中流域の分析は、既存の知見を相対化するためにも、避けて通れまい。本稿は、恐慌下、従来の信用構造が、いかなる課題に直面して、どのように変容したのかを検討することを通して、国民政府期の経済の変容を明らかにしていきたい。

## 〔1〕長江における桐油流通と金融の構造

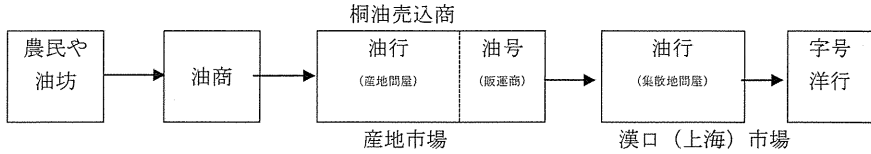
桐油はアブラギリの種子から抽出した工業用乾性油である。古来桐油は燃料や薬剤に使われ、桐樹は清代には湖北・四川の山あいですかんに栽培された。<sup>⑤</sup> 桐油は、第一次世界大戦頃までには、乾燥性・防水性の高さから塗料（ペンキ・ワ

ニス）の原料として主要輸出品の地位を確立する。桐油は、金属部品の保護オイルとして他の追随をゆるさぬ優れた特性があり、航空産業の世界的勃興が追い風になったのである。桐油は、一九二〇年代以降、戦略物資として、アメリカを筆頭に栽培に注力したにもかかわらず、中国は世界全体の約九割にあたる推計一六〇〜七〇万担（担≒六〇・五kg）の桐油を生産した。なかでも長江上・中流は、四川東南部で五五万担、湖南が沅水流域で五〇万担、湖北では三〇万担前後と目される、一大産地になったのである。長江の商品集散地、重慶・万県・常德・津市・老河口・洪江などは桐油の積出地であった。上海と漢口は、竹桶・木桶につめて産地から運ばれる桐油を輸出向に改装する、二大輸出港であった。アメリカ向輸出は、輸出全体の五割から八割を占めた。桐油は、茶・生糸・大豆にならぶ輸出商品として、長江上流から下流にかけて、大規模、かつ恒常的な流通が形成されたのである。<sup>⑥</sup>

一九三〇年代の初頭、長江上・中流域の桐油流通と金融はどうだったのか。各地で異同はあるものの、図1にしたがい、簡単に説明しておきたい。<sup>⑦</sup>

油坊は、搾坊または搾油坊とも呼ばれ、桐油を栽培する農民から桐実を購入して搾油した。農民はあまり搾油しないと

図1 長江上・中流域における桐油流通の構造



(出典)

支那経済資料 15『漢口の桐油と桐油業（桐油）』生活社、1940年（1932年）、49～64頁。  
 編譯彙報 32編『湖南省の桐油と桐油業』中支建設資料整備委員会、1940年（1934年調査）  
 織田武雄「支那に於ける桐油の生産と貿易」『東亜社会経済研究』教育図書株式会社、1942年、252頁

される一方、湖南では七割以上が家内制手工業の一環として搾油するといわれるなど、実態は様ではない。かれらは油商や油行に桐油を販売する。油商は綿布・雑貨・船商などと兼業するものが多い。

油行は産地や仕向地の問屋のことである。彼らは、産地では売手の油商と買手の油号、輸出港では油号と輸出商・字号を仲介し手数料で稼ぐ。万県では「油舗」「過儀行」、洪江では「油莊」などと呼ばれ名称は一定しない。しばしば油行は支店を構え自己勘定取引をお

こない、油号・字号または輸出商に販売することもあった。漢口油行は荷主の委託で山貨・皮毛等を売りこむ問屋が前身のため、兼業問屋も多かったようだ。<sup>8)</sup>一九三〇年代初頭、漢口油行は一五軒をかぞえた。漢口油行は、洋行・字号とはF・O・B（本船渡）で取引する上、純油に精製する必要があるため、最低でも三万元の資金を必要とした、という。<sup>9)</sup>

油号とは産地から漢口に運ぶ桐油売込商である。油号は「客幫」とも呼ばれ、漢口に駐在員をおき、商況把握に努めた。一時的に桐油を扱うものを除けば、油号の大半は油行、すなわち産地問屋という。<sup>10)</sup>漢口の油号は常幫（常德）・津市幫・川幫（四川）・洪江幫・襄桐（湖北）幫など地域ごとにグループを作った。三〇年代初頭油号は五〇軒を数えた。

洋行は外国商社、字号は他地域から漢口に買付にくる商人である。一九三〇年代初頭の漢口では、二〇社ほどの洋行が活躍し、価格を操縦すると言われた。内訳は、イギリス系五社、ドイツ系七社、アメリカ系一社、英支合弁が一社、日系二社、フランス系二社であったという。アメリカ系商社は、アメリカ向輸出が一時八割を占めたにもかかわらず、それほど桐油貿易に関わっていない。中国系の輸出商社も三社ほど存在した。

以上の概要からは、油号や産地油行など、産地と輸出港を  
むすぶ売込商の重要性が確認できる。桐油は、品質が不揃い  
である以上、注文取引はできない。桐油流通は、客商の売  
込、に依存せざるをえなかったのである。<sup>11)</sup>

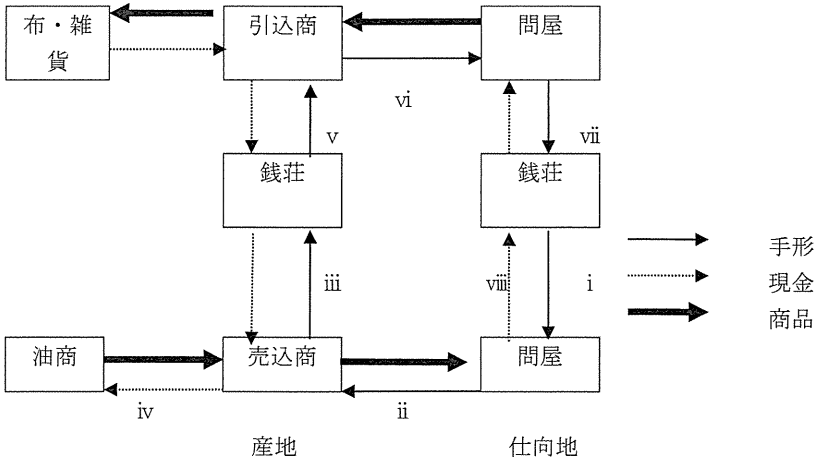
桐油はどのように取引されたのか。四川では糖・油・塩の  
交渉・売買は茶館でおこなわれた。桐油も例外ではない。油  
坊・油商も茶館にあつまり仲介人をたて取引した。<sup>12)</sup>産地油行  
と油商のあいだでは、代金を先に払い、後から桐油をわた  
す、「先銀後油」の慣行が広く行われたという。漢口はどう  
だったか。一九二六年以前、漢口油行は、さかんに産地買付  
をおこない、油行と油号のあいだでも、一〇日〜三ヶ月を期  
限とする、「先銀後油」の取引をおこなっていた。ところが  
一九三〇年代になると漢口油行の産地買付は衰退する。漢口  
油行と油号では、現物取引・現金取引がメインとなる。この  
変容には、一九二〇年代後半以降、桐油価格が下落基調で推  
移したことも、一因らしい。<sup>13)</sup>漢口には規格化された先物市場  
がない。産地での桐油買付後、仕向地への出荷・売却までの  
相場の騰落は、桐油商の採算のみならず、商取引のスタイル  
にまで影響を与えたのである。

こうなると、桐油などの売込商が仕向地に出荷するため、

どのように資金を調達するのかという問題を避けてとるこ  
とはできない。産地油行は、小さいものでは数千円、大きい  
と二〇万円もの資本金をもっていた。だが、産地錢莊による  
油号・油行などの売込商への当座貸越をのぞけば、一般的に  
おこなわれたのは、取引先である漢口の錢莊に匯票を發行さ  
せる、華北の棉花と同様、為替取組を利用したもの、であつ  
た。図2は、匯票と現金・桐油の流れを图示したものである。<sup>14)</sup>

まず、①油号は、漢口錢莊に匯票（期限付自己宛約束手形）  
を發行してもらう。油号は②匯票を産地に送付して、③錢莊  
に売却して産地の貨幣を入手し、④油商から桐油を購入す  
る。⑤産地錢莊は、漢口から品物を仕入れたい引取商に匯票  
を転売する。⑥引取商は、仕入れた綿糸代金などを匯票で問  
屋に支払い、⑦問屋は錢莊に提示して換金する。⑧油号は、  
桐油を漢口に運び、売却代金で錢莊からの借金を返済する、  
というものであった。銀元を産地に運ぶ必要のあるのは襄河  
流域だけであった、という。もちろん油号は、華北と同様、  
漢口宛匯票を振り出して、これと同様の手順で、資金を調達  
することもできた。ただ、油号は錢莊と比べると信用にとほ  
しい。そのため、漢口油行による産地買付以外ではあまり行  
われなかったという。漢口油行による油号への貸出は、華北

図2 長江中流域における桐油金融の構造



手形  
現金  
商品

とはちがい、史料にあらわれてこない。上海や漢口の錢荘の資金力の大きさも、あるのかもしれない。<sup>15)</sup>

ただし、ここで注意すべきなのは、荷積地と輸出港は一九三〇年頃でも緩やかにしか繋がっていなかったことである。産地と漢口の価格はダイレクトに連動していなかった。

一九三〇年から三一年八月、万県と漢口の桐油価格の相関係数は、月別平均で産出すると〇・八一〇六にすぎない。<sup>16)</sup> 売込商は長江の水位が下がり荷積できない冬季には裁定取引に動けなかった。かれらは、世界市場に左右される漢口相場、長江の水位、産地相場、産地・漢口間の為替レートの変動を横目でにらみながら、漢口へ荷積したのである。

世界恐慌期、桐油流通と金融はどう変容したのか。以下、その過程を見ていきたい。

## 〔2〕世界恐慌期の桐油流通

一九三一年九月、満州事変以降の関東軍の中国侵略は、イギリスの金本位制の停止とあいまって、銀本位制下、小康状態にあった中国経済に本格的な世界恐慌をもたらすことになる。満州事変と天津事変は、公債・棉花・小麦・小麦粉など

の商品価格の暴落をひきおこした。商店・錢莊の破産があいついだ。上海の銀行・錢莊は、数十年ない市況悪化を前にして貸出圧縮につとめ、漢口錢莊は銀元の移出禁止を省政府にもとめた。<sup>17)</sup>

上海事変は止めの一撃にはかならない。一九三二年一月二八日、上海ではじまった軍事衝突は、中国経済の中枢を何か月も戦火にまきこんだ。上海の洋釐相場（銀兩建の銀元の値段）は上昇し、漢口の商取引は停止した。銀元は行場を失い、漢口の洋釐相場は下落した。上海では、上海で兌換する銀行券（以下、上海券）が信用を失い、兌換準備の銀元と比べ、一割近くディスカウントされた、という。元来、中国銀行や交通銀行などの発券銀行は、自行券の流通を促すため、上海送金に上海券を使う場合、手数料を免除していた。そのため漢口錢莊は、上海券暴落と上海洋厘相場の上昇を奇貨として、漢口で上海為替を売却する一方で上海券の購入をおこない、その上海券を上海に送付して上海為替の代金支払にあてる、裁定取引をおこなったのである。漢口の上海為替は暴落して、上海券は漢口から姿を消した。漢口金融市場は、一九三二年二月からの三ヶ月の間に、上海券一二〇〇万元、銀元二三〇〇万もの本位幣の上海流出にみまわれた。もちろ

ん、上海に支払準備金を集めたい、銀行側の銀元移送命令もあつたことはいうまでもあるまい。<sup>18)</sup>

漢口の経済は、一九三二年五月の上海事変停戦協定締結後、深刻な不況にさいなまれた。すでに漢口は一九三一年七月から八月に長江大水害にみまわれた。漢口の商店は、一九三一年三月から翌年五月にかけて一三〇〇以上が倒産し、赤字の店舗は一万六千店中四千店にのぼった。漢口錢莊は一〇四行から五六行に減少するなど破綻があいついだ。長江上中流では、月半と月末に決済する慣行があつたが、漢口銀錢業の1回あたりの受払総額は、極端な貸出緊縮と支払準備の積増によって、大水害前の一五〇〇〇六〇〇万元から五〇〇〇六〇〇万元へと四割以下まで急落したのである。信用貸付も八〇九割ほど圧縮されたという。漢口の銀行界も、不動産貸付をさげ、棉花以外なら抵当貸付さえ拒絶するといわれた。むしろ、クレジット・クランチは、漢口にかぎった話ではない。<sup>19)</sup> 湖南では、

近年、湖南商人の資金繰りは順調ではなく、地方産品の売れゆきが滞っている。錢莊は、内地貸出に対して緊縮政策をとっているので、地方産品出産の資金は、いっそう順調な運転が困難になっており、商店で倒産するもの

がしばしば現れている<sup>20)</sup>

とされた。九江では、商会加入店舗八八一軒うち、二六八軒が赤字だったという。むろんこれは「一九三〇年以後：上海の銀行・錢莊は、内地錢莊への貸付に対し皆警戒心を抱き、内地錢莊の上海出張所業務は日に日に衰退<sup>21)</sup>」し、「現在商店は現金をかき集め信用をおぎなう」状況であったことと無縁ではない。このような事態を招いたのは、一九三二年以降、中国をおそうことになる、世界恐慌によるデフレーションにある。一九三三年の米・生糸・落花生・麻布・紅茶の価格は、恐慌以前の五〜六割レベルに低迷した。一九三一年から三四年、重慶・万県の常関の移出高は、一億四四一七万元から七四九六万元に、長沙・岳州も七八四〇万元から四一三二万元へと減少した<sup>22)</sup>。一九三二年の桐油市況は、秋にやや持ち直したものの、銀(元)高金安もあって、まったく回復しなかった。主力品の白桐油も、一担三〇元前後から二二〜二四元に下落していた。老河口・樊城から漢口への桐油積出も不振を極めた<sup>23)</sup>。長江上中流の金融の逼迫は、上海・漢口などの銀行・錢莊・商店による、内地貸付の縮小と農産品の移出不振によってもたらされたのである。

漢口のヒンターランドにあたる湖北や湖南、河南・四川で

は、一九三二年以降、銀元や銀行券の大量流出に悩まされた。一九三二年一〇月以降、重慶では、民国期四川の最大の内戦、「二劉大戦」によって、現金を奪われる錢莊すらあらわれ、年末までに四〇余行中一六行が倒産、三行が業務停止におちいった。長沙の上海為替レートも、千両＝一三〇〇元台から一五〇〇元台に急騰した。長沙は銀元・上海券・銅元のトリプル減に悩まされ、短期金利も平均二割と高止まりした。上海券は、上海為替上昇に伴い、銀元より高値になったことで退蔵され、銅元も銀元・上海券の流通減による銀錢比価上昇によって退蔵されたからである<sup>24)</sup>。むろん、地方政府は手をこまねいていたわけではない。湖南省銀行は、省政府から輔幣券(補助貨幣の銀行券)一〇〇万元の発行権をえていたが、三二年七月には長沙兌換券五二五万元の発行権を獲得する。湖南省銀行の発券高は、一九三三年下半期、コルレス先への為替手数料の免除、長沙錢莊への領用拡大などによって、一二四万元から一時三八六万元まで急伸した。ただ、銀行券の発行は、金属貨幣不足の解消にはならなかった。一九三三年一月、長沙では、公債強制割当に対する錢莊の閉業ストもあって、上海為替一〇〇〇元あたり八〇〇元の打歩がつく、激しい金融パニックに襲われた。湖南省政府は、長

期為替先物の取引を禁止して半月物に限る一方、上海・漢口から、銀二〇〇萬元を取りよせることで、沈静化をはかった、という。<sup>26)</sup>

ここで一九三〇年代中国の桐油流通の動向を確認しておきたい。表1は、桐油輸出高と主要輸出港の推移を示したものである。ここからは、①主要輸出港が漢口から上海に交替したこと、②桐油は、価格こそ低迷したかもしれないが、輸出高は増加傾向だったことが分かる。これは一体、何を意味していたのか。桐油市況は一九三三年に入ると堅調な荷動きと値動きをみせた。漢口桐油市場は、七月から八月には収獲前の品不足感も手伝い、一時、一担三〇元の大台を回復した。<sup>27)</sup> 桐油価格は、八月、漢口で二七元、常德で二二元、万県で二三元二角四分だったという。<sup>28)</sup> 油価は、秋の収獲直後こそ一時二〇元前後に低迷したものの、二五元前後でもみあい、満州事変前の八割のレベルにまでもどした。桐油輸出金額も、一九三三年上半期の一四〇三萬元から下半期には一六二三萬元へ急回復することになる。中国の桐油輸出高は、一九二八年と二九年、一〇〇万担をこえており、V字回復を呈したといつてよい。桐油は、大豆・生糸・茶・卵類・棉花とは対照的に、銑鉄や銅・ブリキなどと並んで、恐慌下中国で異例の

高値にあったのである。<sup>29)</sup> 桐油流通は、銀(元)高金安によるデフレ圧力に内地の信用収縮という悪条件まで含めて考えると、世界恐慌の影響をあまり受けていない、といつてよい。

世界恐慌は、何故、桐油流通にあまり影響を与えなかったのか。まず、考えられることは、一九三三年以降、ソ連、ドイツ、日本やイタリアなど、全体主義諸国の台頭によって、英米仏主導の世界秩序が大きくゆらぎ始めたからである。桐油需要は、緊迫する国際情勢下、急速に高まって

表1 中国の桐油輸出量と取扱輸出港の推移 (単位 担)

	桐油輸出量	上海	漢口
1932	802769	316076	364411
1933	1246842	1064919	69713
1934	1079438	880084	57160
1935	1221683	1034595	38260
1936	1434183	1294026	40014

(出典) 織田武雄「支那に於ける桐油の生産と貿易」(『東亜社会経済研究』教育図書株式会社、1942年、243頁)



いった。次に、輸出相手の七割にあたるアメリカ経済が世界恐慌から脱却しはじめたことを忘れてはなるまい。ニュー・デールをかかげ一九三三年に発足したルーズベルト政権は、財政・金融政策の分野では金輸出禁止と平価切り下げ、すなわち金本位制からの離脱をおこない、アメリカの景気は回復軌道にのりはじめたのである。

ところが漢口の桐油市況は、一九三四年に入ると、またもや低迷に転じていく。輸出額も、一九三四年上半期が一二五四万円、下半期一三六八万円と、三三年を大きく下回った。たしかにアメリカでは桐の植樹が進み、中国依存が減ったのも一因かもしれない。<sup>30</sup>ただ、桐油価格は、三月上旬、一時二〇元強まで下落したものの二三〜二五元で推移しており、下落したわけではなかった。一九三四年の第2四半期から第3四半期にかけては、二七元から三三元に上昇し、九月には白桐油が三三元八角になるなど、値動きは堅調に推移していたのである。<sup>31</sup>世界市場の側には何の問題もなかった。むしろ、

桐油交易は供給が少なくかなり静かである。後に上海からの連絡をうけ、桐油市況は堅調となり高値をつけた。

…漢口市場はこのためひとたびは奮いたったものの、た

だ在庫は品薄で供給が少なくかなりの困難を感じているといわれたように、桐油価格が上昇しても、漢口に回漕されてこなかったのである。漢口では悲鳴があがった。プライステイカーとされた洋行は、長江の水位が回復し桐油の荷積が始まる季節になっても、高値が続くのに手を焼いた。かれらは、購入中止などの手段で、売込商を威嚇したものの、どうしても価格を下げる事ができなかった<sup>32</sup>のである。そもそも万県と重慶の桐油積出高は、前年の四〇万九五八七担、一四八七万一三〇一元にくらべると、三四年には一六万六七四三担、七一八万七八九三元と急減していた。<sup>33</sup>桐油流通に何がおきていたのか。以下、その状況を確認していきたい。

### 〔3〕四川「中央化」と桐油取引の活況

一九三四年八月二三日、剿共戦の失敗にともなう劉湘の辞職声明は、四川全土を激的な金融恐慌にたたきこんだ。重慶では、たんなる取りつけ騒ぎにおさまらず、上海為替レート<sup>34</sup>の暴騰と貨幣市場の激的な逼迫を招いた。万県は桐油の一大荷場積地であった。万県の油行は、川北や川東からくる油商

から桐油を買い、あるものは漢口に出荷、あるものは漢口・上海からくる油号や洋行に転売していたのである。重慶の金融恐慌は、当然、万県を直撃せざるをえない。

万県錢莊は一九三四年の旧曆正月前後では三〇軒であったが、九月末には増加して五〇軒以上になった。はなはだしい場合、油行や福建・広東品を扱う商人なども為替業務を兼営し手がけた。近來、多くの錢莊が上海為替の投機に手をそめ損失を出したため、九月末と一〇月の半ば、2つの決済日に倒産した錢莊は合計一九軒、欠損額は八〇〇萬元に達し、万県の錢莊業の総崩壊現象を生んだ。……。今回の破綻劇では万県の各商業団体でその波及を受けないものはいない<sup>35</sup>

とされたように、万県錢莊の四割が連鎖破綻する、すさまじい金融恐慌に突入したのである。一九三四年一〇月末、万県で営業できた錢莊は一七軒にすぎなかった。漢口・重慶を凌駕する、と称えられた万県の錢莊も、四川から上海への二〇〇〇萬元とも噂された資本逃避を前にしては、ひとたまりもなかったのである<sup>36</sup>。

このような金融恐慌を招いたのは、川北・川東・湘西・鄂西の一带が、国共内戦に見舞われたためである。紅軍第四方

面軍は、一九三二年九月、鄂豫皖ソビエトを放棄して、一二月に川北にあらわれ、三三年二月、川陝ソビエトを樹立した。四川は、川陝と湘鄂西、2つのソビエトとの剿共戦にかりだされ、川陝だけで正規兵十数万、輜重・人夫まで含めると、三〇万人も動員された。川東では難民が一〇〇万以上にたっした<sup>37</sup>。上海における四川筋引取商の綿糸購入高も、一九三一年から三四年にかけて、七万三千包から二万五千包へ、三分の一に激減した<sup>38</sup>。黔水一帯は、湘鄂西ソビエトに近いため、桐油の船積が阻まれ、毎担二〇元前後から一二〜四元まで油価が暴落し、洪江の油莊の取扱高も、往年の三割、一八〇萬元に減少したという。四川の旱魃は追いうちとなった。作柄は半年の六割とされ、万県出回高は五割にみたない、といわれた<sup>39</sup>。万県検査所の基準値以下の桐油の取引禁止によって、一部、老家口・宜昌に回り先が変わったこともあったとはいえ、香港経由で輸出する広西や、浙江安徽の桐油では、減少分は補えなかったのである<sup>40</sup>。

国民政府は、一九三四年一月の劉湘・蒋介石との会談以降、四川「中央化」に着手していく。一九三五年一月、駐川参謀団が重慶に入ると、二月一〇日には、劉湘を主席とした新しい四川省政府が発足、軍閥割拠が終焉をむかえる。国民

政府は、苛捐雑税の廃止、田賦整理、印花煙酒税局の設置と塩税掌握をすすめ、一九三五年七月には重慶行營駐川財政監理処を發足させ、中央銀行重慶支店内に省税国税聯合金庫をおき、三五年八月からは統税を四川に導入した。財政の国地劃分が斷行されたのである。また、四川の金融混乱の元凶、地方銀行券の濫發が止んだことも大きい。一九三五年四月、中央・中国・四川地方の三銀行以外の紙幣は、九月末までに回収することになった。国民政府は、一九三五年九月、中央銀行券によって、四川地方銀行券を八掛で回収する幣制整理を斷行、四川經濟を沿海部に組みこんだのである。<sup>①</sup>

もともと、国民政府や上海經濟界は、世界恐慌下、長江流域の有望な市場先として、アヘン生産があり、資源も豊かな四川へ、遊休資本を導入して經濟開發することを考えていた。一九三四年四月、中国銀行總經理の張公権は、經濟研究室副主任張肖梅、分行副經理史久鰲らをとめない、漢口・宜昌・万県・重慶・内江・自流井・成都・嘉定・叙府・瀘州・北碚など、上海との連絡の少ない四川を中心に、一カ月半におよぶ、長江流域の視察を行っている。だが張公権は、六月一三日、上海資本の四川導入には防区制度・田賦過重・苛捐雑税・幣制不統一の解消が必要不可欠である、と書面談話を

發表した。<sup>②</sup> たしかに、上海金融界の領袖、塩業銀行の呉鼎昌がのべたように、上海貨幣市場が金融緩和しないかぎり、四川への投資は困難かもしれない。<sup>③</sup> だが、四川進出を阻害した制度的障壁は、大方、取り除かれたのである。

そこで表2を確認しておきたい。表2は、一九三三年から三六年初頭までの四川・湖南・湖北における、銀行の本支店数と倉庫数の動向を都市別にまとめたものである。この表から判断すれば、政府系や省政府系以外、すなわち上海の市中銀行などには、長江上中流域への營業進出する意思があったとはあまり思えまい。実際、支店設置は、重慶や万県、成都、長沙、漢口、武昌など、省都クラスの都市への新規出店か、あるいは既設都市への支店を増設することがメインだった。また、長江上中流の物資集散地クラスの都市にまで、支店を積極的に配置していた市中銀行は、貿易部（資本金一〇万元）を傘下にかかえ、桐油取引をおこなっていた、聚興誠銀行くらいであった。しかも、長江の上・中流では、銀行が華北で農産物の抵当貸付を拡大させる上でカギとなった、銀行倉庫の拡充もあまり進んでいるようには見えない。しかも、その銀行倉庫で保管する商品は、綿糸・綿布・雜貨・塩・タバコ・米糧・アヘン・棉花・五金・小麦粉などで

表2 四川・湖北・湖南における銀行の本支店・倉庫数

		銀行数								銀行倉庫	
		1933				1936					
		A	B	C	D	A	B	C	D	1933	1936
四川	重慶	17	3	2	12	26	5	4	17		8
	成都	6	1	3	2	13	4	3	6	5	8
	万県	3	1	1	1	8	2	1	5	2	4
	内江	1	1			6	1	1	4		
	自流井	1	1		2	6	1		5		
	瀘県	2	1	1		4	1	1	2		
	20都市	9	5		4	27	6	1	20	1	2
湖北	漢口	21	3	10	8	33	5	11	17	9	17
	武昌	4		3	1	10	4	5	1		
	宜昌	6	3	2	1	6	3	2	1		
	沙市	5	2	2	1	6	3	2	1	2	9
	10都市	3	1	0	2	13	2	2	9	1	2
湖南	長沙	10	2	5	3	15	4	5	6		
	常德	2		1	1	4	1	1	2		
	衡陽	3	1		2	4	1	1	2		
	8都市	4			4	8			8		

(出典)『民国25年 全国金融年鑑』中国銀行総管理処經濟研究室、K 250~253、267~270、N 9~11、89~92、99~100頁

- A : 総店舗数(本店、支店)  
 B : 政府系銀行 中央、中国、交通、中国農民  
 C : 市中銀行 上海、金城、大陸、塩業、中南、聚興誠、浙江興業、浙江実業など  
 D : 地方銀行 省銀行、市銀行、地方民間銀行

あった。桐油を扱っていた倉庫は、涪陵にあった中国銀行の2つの倉庫くらいしか見あたらない。産地における主要積出港である万県でさえ、銀行倉庫は桐油を扱った形跡がない。<sup>14)</sup>桐油は、一九三二年までは輸出品目では五位以下であったが、三三年に五位に浮上するや、三五年には一位、輸出額四一五八万元、輸出額の八%を占める、戦略商品に成長していた。<sup>15)</sup>一九三六年以降、国民政府実業部は、全国の桐油集散地に中国植物油料廠分廠を設置して、桐油改良事業を展開しようとしていた。<sup>16)</sup>にもかかわらず、長江の上・中流、ひいては桐油への市中銀行の冷淡さは、特筆に値しよう。長江上・中流への上海の市中銀行の進出は、一九三四年以降の四川「中央化」によって障壁が除かれ、一九三五年一二月の幣

制改革以降によって金融が緩和しても、まったく進まなかつたのである。

そもそも注目すべきは、一九三四年下半年から三五年一月の幣制改革にかけて、中国全土が金融恐慌の状態にあつたまさにその時、銀行の倉庫・支店拡充の消極性や信用恐慌とは関係なく、中国の桐油取引が活況を呈し始めたことである。なるほど、四川ならば、

四川の重慶・万県などと上海との間で為替レートが暴騰してから後、……上海に駐在の四川商人は、為替レートが高騰したため、持ちかえる商品を引きとつても売る方法がなく、皆、すでに四川からの来電を奉じて貨物を購入入することを停止している。連日、上海と四川のあいだの汽船は運航しているのに、運び出される貨物はわずかしかない。ただ、上海にやってくる貨物は前に比べてひっきりなしであり、為替レート高騰のため、運びこまれる貨物は容易に販売できる。<sup>(17)</sup>

とあるように、四川為替安のための桐油取引の活性化、と整理できない訳ではない。だが、湖南の常德には、上海為替高の恩恵はなく、湘鄂西ソビエトによる荒廃や、アメリカ銀政策で金属貨幣の払底に苦しんだ。にもかかわらず、桐油はど

んどん漢口へと荷積されはじめる。一九三五年三月下旬以降、漢口桐油価格は、ここ五、六年來ないとされる、一担四〇元を突破したからである。漢口桐油価格は、三五年六月、四五元のラインをこえるにともない、常德の桐油価格は、六月の一担二〇元余から七月には二九元に上昇した。桐油価格は、一九三五年八月下旬、五〇元の大台をこえ、一〇月初旬には、ムッソリーニのエチオピア侵攻のおおりをうけて、前代未聞の一担八六元の値をつけた。さしもの異常な活況も、一〇月中旬、新油の漢口上場にともない、四〇元台まで下落することになる。<sup>(18)</sup>

このように見えてくると、華北の棉花流通とはちがひ、長江上・中流の桐油流通全体は、ほとんど世界恐慌の影響を受けていない、というほかあるまい。桐油は、内地錢莊の破綻や金融恐慌、銀行資本の不在、などのハンデをモノともせず、旱害による桐実生産の減少や戦乱による流通阻害というアクシデントを除けば、産地から輸出港へと運ばれつづけたのである。四川の奥地では、平均利子率が五割にたつ所があつた。上海や漢口などの大都市でも、金融恐慌で一時的利子率は三割にたつていた。<sup>(19)</sup>なるほど、同じ長江の上・中流域でも、桐油流通があまり阻害されなかつたのに対して、

綿糸流通の停滞が深刻だったのは、価格動向、市況の違い、であるのかもしれない。産地から仕向地への出荷の際、産地買付価格に諸コストをのせた額よりも、仕向地での売価価格が下落しなければ、売込商に破綻はないはずだから、である。それでは、長江の桐油と華北の棉花の違いは、どうして生まれたのであろうか。たしかに桐油の売れゆきは棉花よりも良かった。ただし、棉花価格は、民族紡が採算割れになるほど綿糸に比べ高値だった以上、市況が悪い、とまではいえまい。だが、かたや民族紡、かたや輸出用の戦略物資として、どちらも重要な商品であるはずなのに、前者の華北には銀行の支店・倉庫網が展開され、後者には展開されていない。すでに売込商と錢莊は桐油金融で極めて重要であったことを確認している。それならば、桐油流通は、どうして、錢莊や銀行網の展開がなくても、産地から荷積することができたのであろうか。そもそも恐慌期、さかんに「銀行の農村進出」が要請されながら、桐油金融に参入していないとは、いかなる理由によるものなのか。それは信用構造のレベルから問われなければならないはずである。

以下、この時期の桐油金融の論理について、あらためて検討することにした。

#### 〔4〕桐油金融の変容と国民経済の形成

桐油は、市況に恵まれたとはいえ、どうして錢莊の破綻や信用収縮の影響を受けることなく、産地から仕向地に荷積され続けたのか。また、恐慌期における上海の市中銀行の桐油金融への冷淡さは、いかなる論理が潜んでいるのか。この問題を考えるには、産桐地帯における桐油取引を詳しく見ていくことが有益であろう。

恐慌期における産桐地帯の集散地市場では、どのような取引がおこなわれていたのか。湖南・湖北・四川の奥地ともなると、錢莊すら存在していない所も多い。以下の記述は、桐油金融の変容を考える上で、大変、興味深い。

常德は、湖南省西部をつなぐ位置にあり、従来、銀行券も銀元ともに重要視されていた。市場における流通は、すべてが長沙・漢口両市場からの相互の（金融の）調節に依存しているので、経済はなお円滑であったものの、省令で（銀元の）出境が禁止されて以来、銀元の来源が久しく断たれた状態となり、湖南省の西部の各市場取引では銀行券が軽んじられ現金が重んじられるように

なった。そのため湖南省西部の産品を常德に運びこんで売却する際、そのまま違う商品を購入してかえる者もともと多かつたのだが、銀元を手にする<sup>50</sup>と、そのまま持ち帰る者もまた大半を占めるようになった。

もはや説明する必要があるまい。従来、奥地の商取引では、貨物を売却すると、売却先で戻し荷を購入して帰るのが、一般的であり方だったのである。利率が高いと、現金が不足して、入手できない所が多い。そのため、「上塩下油」すなわち塩・糖・酒・麦粉を上流に運んで、売却して現金を入手する。そのかわりに戻し荷として、桐油を購入して、下流に運び出す方法が採られているのである。<sup>51</sup>そもそも、川北の代表的な商業都市であった南充でさえ、下流に搬出する桐油と、蘇貨、すなわち長江下流からの産品の引き取りをおこなう商人は、兼業であった、<sup>52</sup>という。このような専門商ではない形態は、万県といった、桐油の大集散地市場でも同様であった。万県の油行、すなわち「過儼行」は、油糧業とよばれ、桐油と米穀の委託売買を手がけていたのである。<sup>53</sup>

ここであらためて注意すべきことは、一九二〇年代から三〇年代にかけて、中国経済の統合がすすんだことである。長江航路でも、漢口までと上海まででは、四川からだると運

賃・保険料やその他の諸経費を含めると、さほどかわらない、といわれる状況になっていた。これに拍車をかけたのは、一九二九年以降、漢口では、毎担三元の桐油特税を徴収するようになったことである。四川から漢口、上海までの汽船の桐油運賃は、渴水期の冬は毎担二・五元と三・八元、増水期の春・秋が毎担一・五元と二・二元とされていた。<sup>54</sup>こうなれば、

近年以来、漢口に移入される桐油、年々減少傾向にあり、この激減の原因は、たいてい、四川や湖南の内地商人が、近年、多くの場合、直接上海に運んで輸出して、ふたたび漢口を経由することがなくなつたことによる

という事態にならざるをえまい。漢口に入荷する桐油は、一九三二年から三四年にかけて、一八七〇万元、一四三〇万元、六〇〇万元と、どんどん減少していったのである。<sup>55</sup>漢口の桐油輸出額の減少は、移入量の減少よりもさらに激しい。実際、一九三四年、四川の桐油は、五割から六割が上海へと直接積み出された、<sup>56</sup>という。こうなると、桐油の輸出手続も上海でおこなわれ、漢口は中継だけ、という事態になつても仕方あるまい。表1における、漢口からの桐油輸出額の激減と上海の激増とは、中国における経済統合の強化、に起因し

ていたのである。

かくして、欧米商社の洋行は、一九三五年以降、外国における桐油需要の高まりと、漢口における桐油出回りの減少をうけて、万県・常德などにおける、産地直接買付を急速に展開・強化していく<sup>⑤</sup>。これには、外国の汽船会社が油槽設備を整えたため、宜昌などで積みかえる必要がなくなったことも大きい、という<sup>⑥</sup>。表3を確認して欲しい。一九三〇年代、万県では、聚興誠銀行貿易部と洋行が、マーケット・シェアを急激に拡大させていったことが分かる。施美洋行は一九二八年一月、生利洋行は三〇年一月に万県に支店をかまえ、桐油の産地買付を始めた。ここで注意しなければならないのは、聚興誠銀行貿易部も、アメリカの洋行の代理として、桐油の買付をおこなっていたことである。中国系の桐油商でも、中華油号などは、イギリスの安利洋行の代理店であった。なお、一九三四年前半の常德の桐油市場では、聚興誠銀行貿易部が桐油移出で首位を占めており、洋行の直接買付は確認できない<sup>⑦</sup>。おそらく、一九三五年以降に欧米商社の進出がはじまったのであろう。むろん、品質の低い桐油の密移出や、ジャンク船による輸送など、海関を通さない下流への積出は、依然、存在していたはずである。だが、産地から桐油輸

出港へ向けた隔地間取引は、洋行やその代理商社によって、急速に代替されていったのである。

むろん、聚興誠銀行貿易部や洋行といった、近代的な商社組織による隔地間取引の代替は、その金融力の大きさに起因する部分が大きい。万県では、一九三四年の上海為替の投機取引の失敗による、銭荘の大量破綻以降、桐油を出荷する商人は、匯票の売却先に苦慮していた。なかなか、上海為替や漢口為替を買取る引取商や銭荘、銀行などを探せなかったのである<sup>⑧</sup>。そのため、聚興誠

表3 万県桐油市場における桐油移出取扱比率 (単位 %)

	聚興誠銀行	他の華商	欧米商社
1931年	11.50	43.46	45.04
1932年	10.28	46.16	43.56
1933年	9.75	26.37	63.88
1934年	19.91	12.16	68.53
1935年	25.59	14.97	59.84
1936年	25.03	4.19	70.78

(出典) 張肖梅・趙循伯『四川省之桐油』商務印書館、1937年、189頁



以外の桐油売込商は、資金繰りが苦しく、桐油を購入したとしても、ただちに上海為替を売却しなければならなかった、という。だが、聚興誠銀行貿易部は、その親会社である聚興誠銀行による外部金融に支えられていた。聚興誠銀行貿易部は、上海為替レートを見極めて売る余裕があつて、競争上、非常に有利だったのである。<sup>(61)</sup> その競合相手である洋行については、いうまでもあるまい。上海での洋行と桐油売込商との取引では、先渡契約の場合、手付金として、桐油代金の四割を前渡できるほどの金融力があつたのである。<sup>(62)</sup>

それだけではない。長江の上・中流域における、市中銀行の桐油金融への冷淡さの意味を考える際、もつとも大切なことは、桐油の購入をする聚興誠銀行貿易部と洋行自体、綿糸引取商を兼ねていたことではないだろうか。一九三〇年代以降、施美洋行は上海大生紗廠、聚興誠銀行貿易部は漢口裕華・沙市第一紗廠と、四川における綿糸販売の代理店をかねていた。これらの商社は、桐油売込商と綿糸引取商を兼務しており、桐油の売却代金で綿糸を購入して、綿糸の売却代金で桐油を購入することができたのである。四川の綿糸引取商である「字号」は、上海での資金繰りについては桐油・山貨の売込商、漢口での資金繰りについては、黄表紙・生漆の売

込商にたよつて資金の融通をしてもらつた、という指摘とあわせて考えると、大変、興味深い。<sup>(63)</sup> また、洪江から漢口への桐油売込商も、漢口ではその売却代金で綿糸布を購入するなど、綿糸布の引取商をかねていたのである。<sup>(64)</sup>

このように見ると、長江の上・中流において、恐慌期に銀行の「農村進出」があれば求められながら、上海の市中銀行があまり積極的に各地に支店を展開させなかつた理由も、おのずから浮かびあがってくる。桐油売込商が漢口や上海で戻し荷を購入する引取商と同じであるならば、銀行の介在する余地は、漢口や上海の仕向先でならともかく、産地ではあまりない。政府系や省銀行などを除くと、一般に市中銀行は官公金の取扱をしないので、支店をおいても預金を集められない。上海や漢口、万県、もしくは、重慶などの省都クラスの大都市には支店や倉庫を増設したとしても、それ以下の都市にまで設置していく意義とはほしかつたのであろう。ふたたび、図2を確認しておきたい。恐慌期の銭荘の破綻や金融恐慌とは、銭荘が消えることである。ただし、銭荘が破綻するならば、売込商は引取商と連携するか、あるいは聚興誠銀行貿易部や施美洋行のように、2つの機能を兼ねればすむ。在庫期間中、あるいは輸送期間中の金融は、仕向先の漢

口、なかでも、輸出港である上海において、外国銀行、もしくは中国系銀行から借り入れれば良い。はたせるかな、桐油の主要積出港である重慶でさえ、桐油商と銀行の取引自体、あまり多くはなかった。<sup>(65)</sup> 桐油市況が堅調に推移して代金を回収できるならば、錢莊破綻や金融逼迫の影響をあまり受けることなく、上海に積出することができたのである。

むろん、上海の市中銀行は、長江の上・中流域において、手をこまねいていた訳ではない。実際、上海の銀行資本は、綿糸金融に関しては、民族紡やその代理商社に対して、綿糸荷為替取組や綿糸抵当貸出を積極的におこなっていたからである。<sup>(66)</sup> だが、漢口では、棉花と桐油は出回高が二〇〇〇万円をこす二大農産品であったが、上海の代表的な市中銀行、上海商業儲蓄銀行（以下、上海銀行）の漢口支店は、一九三二年、棉花荷為替を四三七万円も取り組んでおきながら、まったく桐油荷為替を扱えなかった。以下の史料は、何故、桐油が扱えなかったのかを的確に伝えていて、分かりやすい。

これら二〇種類の主な移出商品は総額六七〇〇万元以上にのぼっており、もしも漢口支店がその一〇分の一でも荷為替取組の営むことができれば、それだけで六七〇〇万円にもなる。それぞれの商品の中で、洋行に支配されて

いて本行が集めることができないうもの、手形で資金回転をおこなうため荷為替を必要としないようなものがあるが、本行の力が及びそうなものもあるので、それについては実際の調査を待ちたい。<sup>(67)</sup>

結局の所、桐油の国内取引については、金融をおこなうことは当面の急務、といわれながらも、<sup>(68)</sup> 洋行が関係する商品や、錢莊に手形を振出してもらえる商品だと、市中銀行は荷為替金融を展開できなかったのである。

とはいえ、恐慌期、中国の民族系の銀行資本が開拓できた領域の一つとして、輸出荷為替手形の買取業務、すなわち、貿易金融があつたことは、あらためて指摘しておかねばなるまい。上海銀行の漢口支店は、一九三六年度、同行の輸出荷為替手形の買取八二七万元、代金取立四六五万元のうち、九割近くを取扱っており、なかでも桐油がメインであつた。しかも、輸出荷為替の取組は、一九三五年に比べると、五八七万円も増加した、<sup>(69)</sup> という。中国の桐油輸出額の二割が、上海銀行単体でカバーされていたことになる。一九二八年、外国為替の専門銀行として改組された中国銀行や、聚興誠銀行、その他の中国系銀行による貿易金融まで含めれば、おそらく優に過半に達するであろう。上海銀行の漢口支店

が、国外に輸出される桐油の荷為替手形を購入していた以上、漢口から上海への輸送途上にあつた桐油にも、上海銀行は信用を供与していたことになる。つまり、上海の民族系銀行資本は、漢口ではなく上海へ、産地から桐油が直接荷積されていく、中国の経済統合の強化の流れを受けて、洋行などへの輸出金融という搦め手から国内流通に対して信用供与を行っていた、といつてよい。

たしかに、恐慌期、桐油の隔地間取引は、その戦略的輸出商品という性格もあつて、外国資本の商社主導で代替されていったように見える。そのため、錢莊の破産を銀行の支店網や倉庫網の拡大によつて、代替することには限界をかかえていた。また、奥地における桐油の取引も、現金決済から変化したような形跡もない。だが、一九二〇年代以降、上海の民族系の銀行資本は、国内の幣制面や内国金融のみならず、貿易金融においても、着実に地歩を占めつつあつた。欧米列強から一部とはいえ主導権を回収しつつあつた。こうした国民経済の形成、という基礎の上に、対日抗戦力が形成されたのである。

## 「5」おわりに

以上、世界恐慌期中国の長江の上・中流域における信用構造の再編について、桐油流通をとりあげて検討をくわえてきた。それを論点ごとに要約すれば、以下のようにまとめることができる。

まず、一九三〇年代初頭、長江上・中流域における桐油流通は、華北の棉花と同様、「売込商―問屋」という構造をもつていたことである。漢口錢莊の発行する漢口為替の産地での売却は、産地における錢莊などからの借入をのぞけば、売込商の主要な資金調達手段として、強固に残存していた。世界恐慌の中国への到来は、やがて各地で錢莊の破産を続出させることになる。

つぎに、長江上・中流域では、棉花や綿糸とはちがひ、桐油流通はあまり金融恐慌や信用収縮の影響を受けた様には見えないことである。桐油は、軍事向戦略商品のためか、旱害による生産減、戦乱による回漕途絶、価格下落はあつても、好調な輸出を維持した。そのためか、上海の市中銀行も、長江の上・中流域ではあまり進出していない。銀行の本支店数

の増加は、政府系銀行や省銀行が中心で、市中銀行は省都クラス以下の都市には支店を設置しようとはしなかった。そればかりではない。恐慌期、商品抵当貸付を展開していくため、長江の上・中流域に銀行が設置した倉庫でも、あまり桐油を取り扱っていないのである。

最後に、この一見不思議な現象の裏には、中国の経済統合、すなわち外国資本を中心とした商社による、産地での直接買付が横たわっていたことである。錢莊の機能を代替したのは、上海などで銀行借入ができる、近代の株式会社制度下の商社の金融力、といつてよい。聚興誠銀行貿易部や洋行は、桐油売込と綿糸引受を兼任して両者の売却代金で互いに買付をおこなうなど、金融力も際立っていた。そのため、桐油流通では欧米列強のヘゲモニーがむしろ強化されたように見えなくもない。従来、洋行関連商品では中国系銀行が介在できなかったからである。だが、中国の民族銀行資本は、倉庫貸付と荷為替のルートを開拓した棉花、不動産貸付と荷為替で代替した綿糸とはちがいが、桐油では輸出荷為替手形の買取と手形代金取立というアプローチを展開していく。中国系銀行は、欧米列強から一部とはいえ貿易金融の領域を奪還していったのである。

ただし、奥地にあたる地域では、油商は錢莊・銀行から貸出すら受けられないままであった。国民政府の金融統制は、このような零細な商人たちを統御する拠点をもたぬまま、やがて日中戦争、そして国共内戦へと突入することになるのである。

## 註

(1) 中国では、呉承禧『中国的銀行』商務印書館、一九三四年、張郁蘭『中国銀行業發展史』上海人民出版社、一九五七年など。日本でも、宮下忠雄『支那銀行制度論』巖松堂書店、一九四一年が呉の見解を踏襲し、發展の奇形さを強調する。

(2) 銀行の農工業投資研究は、奥村哲、佐野健太郎、富澤芳亜、弁納才一、菊地一隆、飯塚靖、中田昭一各氏により精力的に進められた。詳しくは『日本の中華民国史研究』汲古書院、一九九五年所収、金丸裕一「工業史」や弁納才一「農業史」を参照。近年も、飯塚靖『中国国民政府と農村社会』汲古書院、二〇〇五年、奥村哲『中国の資本主義と社会主義 近代史像の再構成』桜井書店、二〇〇四年、菊池一隆『中国工業合作運動史の研究』汲古書院、二〇〇二年、李一翔『近代中国銀行與企業的關係 一八九七〜一九四九』東大図書公司、一九九七年がある。

(3) 詳しくは、飯塚前掲書を参照。

(4) 拙稿「恐慌期中国における信用構造の再編 ―一九三〇年代華北における棉花流通・金融を中心に―」『社会経済史学』

- 社会経済史学会発行、六七卷一、二〇〇一年。
- (5) 万多山、故民多種桐取其子為油、盛行荊鄂。(『同治增修万県志』、卷十三、地理志)。
- (6) 中村金治『國際商品としての桐油の生産及び流通』東亜研究所、一九四二年、四、五、九、三四、九九—一〇一頁。調査報告『長江流域に於ける桐油事情』横浜正金銀行調査課、一九三六年、五九、七九頁。『滬桐油麻業調査』『國際貿易導報』六卷八号、一九三四年。
- (7) 以下の記述は、支那經濟資料一五『桐油(漢口の桐油と桐油業)』生活社、一九四〇年、六、七、四九、六九頁(三二年調査)、編譯彙報三三編『湖南省の桐油と桐油業』中建設資料整備委員会、一九四〇年、七三、九八頁(三四年調査)、朱羲農編『中國実業誌 湖南省』実業部國際貿易局、一九三五年一〇月、一〇(庚)頁、一五(庚)頁による。万県は、織田武雄「支那に於ける桐油の生産と貿易」『東亜社会經濟研究』教育図書株式會社、一九四二年、二五二—二六二頁。
- (8) 李昌隆『中国桐油貿易概論』商務印書館、一九三三年、一一二頁(脱稿は三一年七月)。
- (9) 『漢口の桐油と桐油業』六五頁。
- (10) 湖南省資江流域では一〇家前後の油号が従事した、という。『実業誌』参照。
- (11) 『上海商業慣行調査(一)』『滿鉄調査月報』二〇卷七号、一九四〇年、五〇頁。
- (12) 『四川桐油生産貿易状況(続)』『工商半月刊』二卷九号、一九三〇年。
- (13) 価格上昇時は内地買付の「先銀後油」、平静・下落時は売込形式の「先貨後銀」がみられるという指摘がある(浙江省於潜県桐油調査)『國際貿易導報』六卷七号、一九三四年)。
- (14) 重慶中國銀行『四川省之山貨 下卷』中國銀行總管理処經濟研究室、一九三五年、五八、六三頁。「湖南貿易調査(続)』『工商半月刊』四卷一四号、一九三二年などを参照。
- (15) たとえば上海・漢口の錢莊は、平時で長沙錢莊・商人に千万兩を貸し出していた。湖南の洋貨引取商は、為替送金の遅延で支払期日がきたとき、漢口の錢莊・銀行から当座貸越を受けられたという(『湖南貿易調査』『工商半月刊』四卷一三号、一九三二年)。
- (16) 平漢鐵路管理局經濟調査班『万県經濟調査』生活社、一九四〇年、六〇、六六頁。
- (17) 『漢錢業請禁現出省』『錢業月報』一二卷一、一九三二年。「上海銀行檔案・通函第四四号、一九三二年一月三〇日」(中國人民銀行上海市分行編『上海商業儲蓄銀行史料』上海人民出版社、一九九〇年、三三六—八頁)。
- (18) 以上のことは「上海銀行檔案・密字通信第一号、一九三二年二月二六日」同前、三四八—五〇頁。「国内金融 漢口」『中央銀行旬報』九八、九九、一〇〇、一〇一、一〇三、四、「廿一年上期漢口金融商情概要』『工商半月刊』四卷一三号、一九三二年による。
- (19) 同前『半月刊』、「漢口一年來之經濟狀況与禁現出口』『中行月刊』五卷一期、一九三二年。民国前、比期受渡高は七千万と云う(『漢市錢業近況』同前九卷五期、一九三四年)。
- (20) 近年湘商金融不暢、土貨滯銷、錢莊对于内地放款、取緊縮政策、土貨出產資金更難周轉靈便、商家之倒閉者層見迭出(『湖南貿易調査(続)』『工商半月刊』四卷一四号、一九三三年)。
- (21) 一九三〇年以後：上海銀錢業対内地錢莊放款咸有戒心、申莊業務日漸衰落(『上海錢莊史料』上海人民出版社、一九六〇年、一八三—四頁)。「九江商業衰落』『國際貿易導報』六卷六号、

一九三四年。

(22) 目前商店、籌集現款彌補信用（結賬後之金融界狀況）『申報』一九三二年六月一八日。

(23) 張肖梅『四川經濟參考資料』中國國民經濟研究所，一九三九年，U—二頁。『實業志』一六〇七（乙）頁。『上海銀行檔案：通函第五五號』一九三三年一月一〇日。『上海銀行史料』三五一—三五頁。

(24) 『民國二十一年第三第四季貿易報告』『國際貿易導報』五卷四號，一九三三年。『各地金融市況』漢口。『中央銀行月報』二卷二—三號，一九三三年。

(25) 注20「湖南貿易調查」續。「川省反對軍事公債」『錢業月報』三卷一號，一九三三年。「重慶銀莊倒閉十六家」『中行月刊』五卷五期，一九三三年。「湘省禁止現洋出口之影響」『銀行週報』一七卷五號，一九三三年。

(26) 「湖南省銀行券通匯免費」『湘省禁錢業做違期匯兌』『中行月刊』六卷六期·七卷六期，一九三三年。胡適『湖南之金融』湖南經濟調查所，一九三四年，六七〇八、七一、一四四頁。「湘省府強募公債風潮」『申報』一九三三年一月八日。

(27) 『商業新聞』油市『申報』一九三三年八月四日·二九日。

(28) 「桐油對美輸出銳增」『中行月刊』七卷三期，一九三三年。

(29) 『萬泉經濟調查』，六七〇八頁。『民國二十二年第一第二季貿易報告』『民國二十三年第一第二季貿易報告』『民國二十三年第一第二季貿易報告』『國際貿易導報』五卷一〇號（一九三三年·六卷一〇號（三四年）、七卷六號（三五年））。

(30) 注29「民國二十三年第一季第二季」『民國二十三年第三第四季』『滬桐油麻業調查』『國際貿易導報』六卷八號，一九三四年。

(31) 『萬泉經濟調查』，六八〇九頁。「商業新聞」油市『申報』一九三四年九月二五日。

(32) 桐油交易因來源不多，頗覺平靜，後得申訊，貨色堅俏。：漢市為之一振，惟存底薄弱，來源不多，頗感困難（各地金融市況）漢口『中央銀行月報』三卷八號，一九三四年。

(33) 『商業新聞』油市『申報』一九三四年六月十七日。

(34) 張肖梅·趙循伯編『四川省之桐油』商務印書館，一九三七年，九一頁。

(35) 萬泉錢莊在本年二月時，共三十家。九月底以前，增至五十余家。甚至「過儼行」及南貨商號等亦可兼營匯業。近來因各莊多賭串匯失利，於九底，十半阿比期中共倒閉錢莊十九家，虧折達八百萬元，形成萬市錢莊業之總崩潰現象。……此次倒閉風潮，萬市各幫，無不受其波及（「萬泉錢莊之倒閉風潮」『四川月報』五卷四號，一九三四年）。

(36) 「萬泉金融風潮續誌」『四川經濟月刊』二卷五期，一九三四年一月。『萬泉錢莊倒閉十余家』『中行月刊』九卷五期，一九三四年。

(37) 「川局何以善後」『川北匪區難民達百萬』『大公報』一九三四年九月二日，一〇月二〇日。

(38) 「張肖梅談考察感想」同前六月一三日。『民國二十四年申報年鑑』申報年鑑社，J八頁。

(39) 『商業新聞』油市『申報』一九三四年四月六日、五月二〇日。『黔江桐油業概況』『四川經濟月刊』二卷六期，一九三四年。

「湖南洪江之主要商業調查」『工商半月刊』七卷九號，一九三五年。『萬泉桐油業近詢』『四川月報』五卷四期，一九三四年一月。『民國二十三年重慶財政金融及進出口貿易之回顧』『中行月刊』一〇卷三期，一九三五年。

(40) 「萬泉桐油商反對檢驗所提高度數」『四川月報』五卷一期，一九三四年七月。『萬泉經濟調查』，三五—五五頁。The Maritime Customs, *The Trade of China 1934*, Vol.1, Shanghai.

1935, p.63. 杭州では上海ではなく漢口相場の動向をみて建値していた。杭州は漢口より二元高い値が付られたという。「浙江杭州桐油調査」『國際貿易導報』六卷一、二号、一九三四年、九四頁参照。「浙省産銷不振」『申報』一九三四年二月一八日。

(41) 「川財庁長宣布之整理四川財政弁法」「重慶各銀行鈔票省府令六個月内收回」「八折收銷地鈔情形」『四川菸酒稅局近況』「四川月報」六卷三期、六卷四期、七卷二期、七卷四期、一九三五年。「省府實行廢除苛雜」『行營設駐川財政監理処』「四川經濟月刊」三卷三期、四卷一期、一九三五年。「川鹽稅應解財署」『省政府將弁營業稅財署實行統稅制』『新蜀報』一九三五年六月二二日、八月三日。「責任重大之四川新省府」『大公報』同年二月一三日。

(42) 「内地与開發」『銀行週報』一八卷一四号、一九三四年。「川省開發声浪」『中行總經理張公權入川考察』「張公權暢論遊歷四川感想」『申報』一九三四年三月一四日、四月二九日、六月一四日。「長江に排日絶え 有望な四川市場」『大阪毎日新聞』一九三四年五月一〇日。

(43) 「河北經濟協會」『大公報』一九三五年九月五日。

(44) 「民國二五年全國金融年鑑」中国銀行總管理処經濟研究室、一九三七年、K二五〇〜二五三、二六七〜二七〇、N九九〜一一、八九〜九二、九九〜一〇〇頁。なお、漢口と沙市の銀行倉庫の貯藏物資は「農産品」「出口貨物」と、桐油を含みうる表記がなされている。

(45) 織田前掲書、二四〇〜三頁。中村前掲書、九九〜一〇〇頁。

(46) 「桐油業近況」(4) 中国植物油料廠近訊『四川月報』九卷一期、一九三六年。

(47) 四川重慶万県等処与上海間之匯水暴漲後、……旅滬各川帮因

匯水高漲、弁去之貨、無法銷售、均已奉電停弁去貨、連日滬川之輪船開航、去貨寥寥。惟來滬反較前擁擠、因匯水高漲、來貨易銷(滬交易所停拍申票)『工商半月刊』六卷二〇号、一九三四年)

(48) 「湘西銀根奇緊」『大公報』一九三五年四月二六日、「商業新開」『油市』『申報』一九三五年三月一九日、四月二〇日、五月七日、八月一・二・三・三〇日、一〇月七・一七・二七日。「各地金融市況」長沙『中央銀行月報』四卷七号、同八号、一九三五年。

(49) 拙稿「幣制改革と中国信用機構」『名古屋大学東洋史研究報告』二九号、二〇〇五年。「各県貸款利率概況」『四川月報』九卷一期、一九三六年。

(50) 常市地縮湘西、向來以紙現並重。流通市面、全恃長漢兩埠之互相調劑、故經濟尚屬靈活、自省令禁止出境以來現金來源久断、而湘西各埠交易輕紙幣而重現金。以故土貨運常、將貨易貨者固多、而兌現者亦居其大半。(湘西銀根奇緊)『大公報』一九三五年四月二六日。

(51) 支那經濟資料『平漢鐵路管理局經濟調查班編 涪陵經濟調查』生活社、一九三六年、二五頁。前掲『湖南省の桐油と桐油業』七七〜九八頁。

(52) 「川北重要各埠之商業貿易(1) 南充」『四川經濟月刊』六卷二期、一九三六年。

(53) 「万県市商業調査」『四川經濟月刊』三卷六期、一九三五年。

(54) 「中国桐油生産概況」『工商半月刊』四卷二四号、一九三三年。「長江流域に於ける桐油事情」横濱正金銀行頭取席調査課、一九三六年、七三頁。「産業 四川桐油貿易活躍之一般」『四川經濟月刊』四卷四期、一九三五年。張育梅・趙循伯前掲書、八九頁。

(55) 近年以来、漢口進口桐油、年趨減少、此種激減原因、大抵由於川湘內地商家、近多直接運滬出口、不復經由漢口（近三年来我國重要商埠之内國貿易（2）漢口（上）『銀行週報』一卷四二号、一九三五年）。

(56) 「商業 桐油業雜訊」『四川月報』五卷六期、一九三四年。

(57) 「商品 漢口 十一月份」『中行月刊』一一卷六期、一九三五年。

(58) 「我國桐油對外貿易的檢討」『申報』一九三五年二月一八日。

(59) 「商品 漢口」『中行月刊』一一卷六期、一九三五年。「四川桐油貿易活躍之一般」、『万県桐油業調査』『四川月報』八卷三期、一九三五年。「万県之桐油業」『四川經濟月刊』三卷三期、一九三五年。「常德縣之工商業現況」『工商半月刊』六卷一八号、一九三四年。

(60) 「万県貿易調査」『四川經濟月刊』四卷五期、一九三五年。

(61) 「万県經濟調査」四九頁。

(62) 注30 「滬桐油麻業調査」。

(63) 注60 「万県貿易調査」。張肖梅編前掲書、S六〇七頁。なお、万県での第一紗廠の代理店には中華（油号に中華油号がある）がある。

(64) 「湖南洪江之主要商業調査」『工商半月刊』七卷一〇号、一九三五年。

(65) 編訳彙報『四川省政察報告書』中支建設資料整備委員会、一九三九年、二〇八―二〇九頁。平漢鐵路管理局經濟調査班『重慶經濟調査（上）』生活社、一九四〇年、三五二頁。

(66) 「交通銀行二十二年度營業報告」『民國二十四年全国銀行年鑑』中国銀行総管理処經濟研究室、一九三六年、I、一〇〇―一〇八頁。前掲『上海銀行史料』六二七―二八頁。

(67) 此二〇項大宗出口商品、総値在六七〇〇萬元以上、如漢行能得其十分之一之押匯生意、亦已有六七〇萬元之多。各項商品中

有為洋行所操縱、非本行所能兜攬者、有以票據為周轉方法而無需于押匯者、但亦有本行力所能及者、則有待于實際調査也（上海銀行檔案…密字通信第二四号、一九三三年八月一四日）

(68) 「最近一年來桐油出口概況」『中行月刊』一八卷五〇号、一九三四年、六頁。

(69) 「上海銀行檔案…總行行務會議上國外外部報告 一九三七年三月二四日」『上海銀行史料』一九九〇年、六六三―六四頁。

（おかげさ きよのぶ 愛知県立大学客員共同研究員）